『風と共に去りぬ』作品論

紀伊国　志　麻

私たちは、ゼミの中で『風と共に去りぬ』についての作品論を話し合ってきました。今もなお、この作品は多くの人々に愛され読まれています。その魅力と疑問点など最終的にレポートとしてまとめ、自分なりの作品論を展開してみたいと思います。「主人公スカーレット・オハラの運命」私はこれをテーマとしました。この「運命」という背後には様々な要因がはたらき、この作品をより効果的に高めています。その要因を私なりに見解していきたいと思います。

※背後にある要因　①スカーレットにとっての両親の存在　②重なり合う人物(ジェラルドとレット、エレンとメラニー)　③スカーレットが見る「悪夢」　④「タラ」という土地の存在。

①から順番にみていくことにします。スカーレットと父ジェラルド、二人は性格上共通している所がある。作品では、二人共土地への深い愛着心に燃え、野性的でたくましく描かれている。そして母に対しては「聖なる神」のような存在としてとらえている。

②にあるように、スカーレットの両親と重なり合っている人物がこの作品には登場します。私自身の推測ですが、ジェラルドと後のスカーレットの夫となるレット・バトラーが類似していること、そしてエレンとスカーレットの親友であるメラニー、この両者も偉大な貴婦人として似ている所が多い。こうして父と母の面影を、レットとメラニーの中へ写し出すことで「両親の存在」をより強烈に印象づけている。このことが根底にあるため、スカーレットの人生がとても激しく、劇的に見えるのではないだろうか。

③にある悪夢についていうとこの悪夢は単なる「夢」ではなく、予知夢であることに読んでいて気がつきます。作品のクライマックスへ向けて、スカーレットの見る夢は現実のものになっていくことがわかります。以前から何かを暗示するように「夢」は作品に登場し、読者にこれからの展開を予測させているのです。

最後は「タラ」という土地の存在です。私は、最終的にこの土地に行き着いてしまいました。スカーレットの運命を握っていたのは「タラ」の因縁であると感じたからです。この因縁に翻弄されたのはスカーレットだけではなく、彼女の両親やすべての人々もそうだったのではないだろうか。

私が作品を読んできて疑問に残ってしまったことがあります。この「タラ」の因縁が、彼らを不幸にするものなのか、幸運に導くものなのか、私はずっとわからないでいる。しかし、この疑問こそが『風と共に去りぬ』が永遠のベストセラーになる要因ではないかと勝手に解釈をしています。この小説の作品論は、多分、私たちが年齢を積み重ね、その段階ごとに変わっていくように思えてなりません。

(指導教員　中村　敦志)